

沓掛良彦著『讀酒詩話』

岩波書店

中国において詩と酒は「有酒詩自成」(酒有れば詩自ずから成る・蘇軾)と詠われ、また李白が酒仙、白楽天が酔吟先生といわれることから分かるように、両者は古来形影相伴う関係であった。「詩酒」という語はそうした詩と酒の深い交わりを示す言葉である。

本書は、酒を愛し詩を愛することにかけては人後に落ちることはないと自負し、「詩酒合一」が成し遂げられた漢土の飲酒詩こそは、まことに世界の至宝」と中華飲酒詩を偏愛する著者が「本朝には詩人と酒の関わりについての個々の研究論文やエッセイはあっても、広く『詩人と酒』という問題を扱った書物がない」「酒を愛し詩を愛する一人の男として、これはなんとも寂しいかぎりである。そういう本は書かれねばならぬ、よしそれでは俺が書こう」(あとがき)と、東西の古典詩から好むところの酒の詩を取り出し、それぞれにおける詩酒の交わりについて語った詩話である。

東西の古典詩を論ずることは誰にでもできることではない。幾つもの言語とそれによって書かれた詩に通じていなければならぬ。本書はギリシャ語、ラテン語をはじめ多くの言葉に通じ、酒と詩をこよなく愛する——著者の自らを「東都の酒顛」と呼ぶのに倣えば——「酒顛」にして「詩顛」でもある著者ならではの書である。本書の刊行によってわが国もひろく「酒と詩」を論じた書を有することとなったわけで、まことに目出度い。「且盡手中杯(李白)」。

本書は第一部の西洋篇に、古代ギリシャ、ローマの飲酒詩、ラテン中世放浪学徒の酒の歌、ボードレール『悪の華』の酒について五篇の詩話を、第二部の東洋篇に、中華飲酒詩、大伴旅人の讃酒歌、一休和尚の漢詩集『狂雲集』の飲酒詩、芭蕉の俳句、江戸の漢詩人・大田南畝の酒の詩について五篇の詩話を収める。

著者は軽妙洒脱、芳醇たる語り口で、読む者を東西古典詩の詩酒交わりの世界に誘い、古代ギリシャでは葡萄酒を水割りにして飲み、また独酌はなく仲間と飲んだとか、古典ラテン詩においては酒は恋の小道具としてしか詠われておらず気に入らないとか、大伴旅人の歌には本朝には珍しく詩酒の交わりがあるがその酒は暗く湿っぽいとか等、さまざまな酒風について語り、さまざまな詩境、酒境を味わせてくれる。十篇の詩話は互いが互いを照らしあい、また個々の詩話においては、例えば、古代ギリシャの詩を語るのに中華の詩句が引かれ、大伴旅人の讃酒の和歌を語るのに中華、ギリシャの詩句が引かれ、といった具合に、異なる時空、異なる言語、異なる形式の酒の詩がその境界を越えて比較対照され、それによってそれぞれの詩、詩人における詩酒の交わり具合、酒風、酒境がまことに鮮やかに浮かび上がっている。あたかも著者に導かれ聞酒をしているかのごとくだ。「何以解憂、唯有杜康(何を以てか憂を解かん、唯だ杜康あるのみ・曹操)」など酒飲みにとっては思わず、得たり、と膝を打ってしまいそうなありがたい詩句と随所で出会えるのも何ともうれしい。

圧巻は何と言っても中華飲酒詩についての詩話である。中華飲酒詩の精華ともいべき詩とそれを前にますます冴える著者の語り口によって全篇芳醇たる香りが漂っている。「詩酒合一」の境成った「世界の至宝」とはどんな詩か。よく知られたものを二、

三引いてみる。

兩人對酌山花開、一杯一杯復一杯

我醉欲眠卿且去、明朝有意抱琴來（李白・山中與幽人對酌）

（兩人對酌すれば山花開く、一杯一杯また一杯、

我酔うて眠らんと欲す卿且く去れ、明朝意有らば琴を抱きて来たれ）

渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人（王維・送元二使安西）

（渭城の朝雨輕塵を浥し、客舍青青として柳色新たなり、

君に勸む更に尽せ一杯の酒、西に陽關を出づれば故人無からん）

葡萄酒美酒夜光杯、欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回（王翰・涼州詞）

（葡萄酒の美酒 夜光の杯、飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す、

酔うて砂場に臥すとも君笑う莫かれ、古來征戰幾人か回る）

絶品である。こんな詩を前に酒杯を把れば、正に「寛心應是酒、遣興莫過詩（心を寛ぶるは應に是れ酒なるべく、興を遣るは詩に過ぐるはなし・杜甫）」の境地を味わえるというものだ。

中華飲酒詩の詩篇、詩句は本書の随所に引かれている。いずれも酔中酔余に著者自らの血肉と化すまでに幾度となく吟じ反芻されてきた詩句であるにちがいない。著者の意図するところかどうか、本書は、酒の詩は中華の飲酒詩が古今の世界に冠絶しているという著者の言葉を実証する書としても読めるほどだ。

東洋篇では、中華において飲酒詩がなぜあれほど豊饒であるのか、それに比べ、中華の詩を手本とした日本漢詩をも含め、わが国の古典詩歌においてはなぜ詩酒の交わりが浅いのか、という問題についても語られ、刺激的だ。

和歌や俳句はなんといっても日本語であり、「感ずる」ことができる。中国の古典詩も漢字と日本語との切離せぬ深い関係により訓読でもあるリズムを感じながら読むことができる。しかし原語を知らない西洋の詩となるとそうはいかない。残念ながら翻訳でしか読めない。しかし本書を読んで思うに、詩酒の交わりということから言えば、中華飲酒詩が世界に冠たることだけは確かなようである。

それにしても著者は酒を飲みながら、こんな豊饒な詩の世界に遊んでいるのか、と思う。日暮になると人に酒を飲ませるという酒魔にでも魅入られるのか、「借問酒家何處有（借問す酒家何れの処にか有る・杜牧）」と煙花の巷を徘徊し、酒家に到れば、「莫思身外無窮事、且盡生前有限杯（思う莫れ身外無窮の事、且く尽せ生前有限の杯・杜甫）」今朝有酒今朝醉、明日愁來明日愁（今朝酒有らば今朝酔い、明日愁い來たらば明日愁う・羅隱）」と酒瓶を倒す日々を送るばかりで、中国文学を己の専門領域としていながら「世界の至宝」たる中華の古典詩を酔吟することなどなく、まして西洋の古典詩、日本の古典詩歌などについてはまったくの素人、ひたすら酒を食らうだけの酒鬼、重度の瓶蓋病者にすぎぬ身であれば、おこがましくもあるが、そのうち、中華の飲酒詩を肴に中華の酒を酌み交わし、詩酒合一の境についての話を更に伺いたいものである。